

ホンジュラス内政・外交（２０１０年７月）

概況

【内政】

●５日、ロボ大統領は、米マイアミを私的に訪問した際に、インスルサＯＡＳ事務総長と会談し、セラヤ前大統領の帰国をめぐる問題及び未だ関係を正常化させていない諸国との和解のメカニズムにつき協議した。また、インスルサ事務総長は別途３日にドミニカ（共）においてセラヤ前大統領との会談を行った。

●野党自由党の内部分裂：１４日、自由党党本部は記者会見を実施し、党内の統一を模索するため、セラヤ前大統領との対話を目的とした委員会をドミニカ（共）に派遣する予定である旨発表した（注：その後、同派遣は実現していない）。他方、１５日、一部の自由党員による会合が開催され、党本部メンバー改選の請願書の提出が提起された。

●CID-Gallup 社による中米各国大統領評価に関する世論調査（２０１０年５月～７月にかけて中米地域内で無作為に選出された各国最低１，０００人を対象に実施したもの。）によれば、ロボ大統領は野党自由党支持者や無党派層の非難のため、同調査では４位（支持６０％、不支持２２％）となった。

【外交】

●１５日、パティーニョ・エクアドル外相は、エクアドル政府の立場として、「軍事クーデターの責任者に対する明確な制裁あるいは審理が行われない限りは、エクアドルはホンジュラスのＯＡＳ復帰を受け入れられない」旨述べた。

●２０日、エルサルバドルにおいて中米統合機構（ＳＩＣＡ）臨時首脳会合が開催され、出席した各国首脳（エルサルバドル、グアテマラ、コスタリカ、パナマ、ベリーズ、ドミニカ（共）。オルテガ・ニカラグア大統領は会合を欠席。）により共同声明が発出された。右共同声明において、ＯＡＳ加盟諸国に対してホンジュラスのＯＡＳへの早期復帰が求められた。

●２８日、ロボ大統領は、非公式にエルサルバドルを訪問し、ホセ・ルイス・メリーノＦＭＬＮ幹部（ロボ大統領とはロシア留学時代からの友人）及びエルサルバドル企業家らと短時間の会合を行った。右会合において、ホンジュラス国内セラヤ支持グループとの仲介をＦＭＬＮに務めてもらう可能性についても協議した模様。

●２９日、カナワティ外相は「ホ」国の新しい駐日大使としてマルレーネ・ビジェラ・デ・タルボ前駐台湾大使を任命した。

●ＯＡＳハイレベル委員会による報告書を受け、チリ（３０日）及びメキシコ（３１日）は、それぞれホンジュラスとの外交関係を正常化し、昨年の政変以降に召喚されていた駐ホンジュラス大使を帰任させる旨発表した。

【内政】

1 セラヤ前大統領の帰国問題

6日、ロボ大統領は、5日に米マイアミを私的に訪問した際に、インスルサOAS事務総長と会談し、セラヤ前大統領の帰国をめぐる問題につき協議した旨明らかにした。また、インスルサ事務総長は別途3日にドミニカ（共）においてセラヤ前大統領との会談を行った。ロボ大統領は、セラヤ前大統領の汚職問題を担当する特別裁判所の設置について、「政治的中立性を確保する観点から必要であるならばそのような設置も可能であると最高裁は言っていた。」旨述べた。また、ロボ大統領によれば、インスルサ事務総長との会談において、未だ関係を正常化させていない諸国との和解のメカニズムについても話し合われた。

2 野党自由党の内部分裂

（１）14日、自由党党本部は記者会見を実施し、党内の統一を模索するため、セラヤ前大統領との対話を目的とした委員会をドミニカ（共）に派遣する予定である旨発表した。また、記者会見において、マルドナルド党本部メンバーは昨年6月の政変は「クーデターであった」と言明し、党内の統一を図るためにもセラヤ前大統領と対話を持つ必要がある旨述べた。同発言に対し、ケサーダ党本部幹事（ミチェレティ前「大統領」の元秘書）は、マルドナルド氏の見解は同氏の個人的見解であり、党本部の見解ではないとし、党本部としては昨年の政変をクーデターとは見なしていない旨述べた。昨年6月の政変の捉え方を巡って、自由党党本部内において見解の不一致が見られる。

（２）15日、一部の自由党員による会合が開催され、党本部メンバー改選の請願書の提出が提起され多くの出席者の賛同を得た。出席したセラヤ派有力政治家のひとりであるオレジャナ元国防大臣は、「現在の自由党党本部は、党内の様相を反映していない。予定よりも早く改選選挙をすべきである」と述べた。

3 中米各国大統領に対する評価（世論調査結果；21日付当地ラ・トリブナ紙）

CID-Gallup社による中米各国大統領評価に関する世論調査（2010年5月～7月にかけて中米地域内で無作為に選出された各国最低1,000人を対象に実施したもの。）による結果は以下のとおり。

- ・フネス・エルサルバドル大統領：国民の約4人中3人が支持
- ・マルティネリ・パナマ大統領：支持率66%
- ・チンチージャ・コスタリカ大統領：支持率64%
- ・ロボ・ホンジュラス大統領：支持60%，不支持22%（野党自由党支持者や無党派層の非難による）
- ・コロソ・グアテマラ大統領及びフェルナンデス・ドミニカ（共）大統領に対しては、全体的な評価は低いものの、非難よりもその働きを評価する国民の方が多かった。

・オルテガ・ニカラグア大統領：政策への非難が増加し、国民5人中僅か2人がオルテガ大統領の働きを支持。

【外交】

1 ホンジュラスのOAS復帰問題に対するエクアドルの立場

15日、パティーニョ・エクアドル外相は、「軍事クーデターの責任者に対する明確な制裁あるいは審理が行われない限りは、エクアドルはホンジュラスのOAS復帰を受け入れられない」旨述べた。また、パティーニョ外相は、同日行われたコレア・エクアドル大統領とインスルサOAS事務総長との会談において、コレア大統領がインスルサ事務総長に対して同内容を伝えた旨明らかにするとともに、この立場はエクアドル政府の立場であり、南米諸国連合（UNASUR。エクアドルは現在議長国）の立場ではない旨強調した。

一方、インスルサ事務総長は、エクアドルの立場についての意見を述べることは差し控えた上で、「こういった立場をOASにおける決定にどのように取り入れていくか考えたい」旨述べた。

2 SICA臨時首脳会合（ホンジュラスのSICA復帰）

20日、エルサルバドルにおいて中米統合機構（SICA）臨時首脳会合が開催され、出席した各国首脳（エルサルバドル、グアテマラ、コスタリカ、パナマ、ベリーズ、ドミニカ（共））により共同声明が発出された。右共同声明において、OAS加盟諸国に対してホンジュラスのOASへの早期復帰が求められた。なお、オルテガ・ニカラグア大統領は本臨時首脳会合には出席せず、本共同声明へのニカラグア代表者による署名は行われなかった。今次SICA共同声明について、ロボ大統領は「今次SICA共同声明を以て、これまで我々が行ってきた国内和解の模索を中米地域が支持していることが明らかになった。この中米の立場は、OASに対して、ホンジュラスを巡る状況が正常化されるべきという明確なメッセージを送っている。」旨述べた。

3 ロボ大統領のエルサルバドル非公式訪問

28日、ロボ大統領は、非公式にエルサルバドルを訪問し、ホセ・ルイス・メリーノFMLN幹部（ロボ大統領とはロシア留学時代からの友人）及びエルサルバドル企業家らと短時間の会合を行った。ロボ大統領は、FMLN幹部との非公式会合の事実を認めるとともに、右会合においてホンジュラス国内セラヤ支持グループとの仲介をFMLNに務めてもらう可能性についても協議した旨述べた。

なお、ロボ大統領の今次訪問と時期を同じくして、セラヤ元大統領夫人が、エルサルバドル左派系セラヤ支援団体の招待を受け、エルサルバドルを訪問していた。

4 駐日大使の任命

29日、カナワティ外相は「ホ」国の新しい駐日大使としてマルレーネ・ビジェラ・デ・タルボ前駐台湾大使を任命した。ビジェラ氏はカジェハス政権及びレイナ政権において在OAS大使を、また、ガビリアOAS事務総長の下でOAS常設理事会議長及びOAS対人地雷問題顧問（98年～02年）を歴任した。

5 メキシコ及びチリとの外交関係正常化

OASハイレベル委員会により29日に提出された報告書において、政変関連の諸問題に対するホンジュラス政府及び関係者の対応に重要な進捗があると報告されていることを受け、チリ（30日）及びメキシコ（31日）がホンジュラスとの外交関係を正常化した。

ア. チリ：30日、モレノ・チリ外相は、昨年6月の政変以降召喚されていたセルヒオ・ベルドゥゴ駐ホンジュラス・チリ大使を現地に帰任させる旨発表し、チリとホンジュラスの外交関係が正常化した。

イ. メキシコ：31日、メキシコ外務省はコミュニケを発出し、ホンジュラスとの外交関係を正常化し、昨年6月の政変以降召喚されていたタルシシオ・ナバレテ駐ホンジュラス・メキシコ大使を現地に帰任させる旨発表した。